法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-14

<随想>四日間の印象 : 杉本先生に関する一通教生の思い出

古田, 芳江 / フルタ, ヨシエ

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
57
(開始ページ / Start Page)
120
(終了ページ / End Page)
121
(発行年 / Year)
1998-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020002

四日間の印象

――杉本先生に関する一通教生の思い出――

古田　芳江

法政大学を卒業してから、すでに二〇―四〇年も経っていようかと見受けられる方たちが大学院棟に集う文学研究会がある。通教生であった私も、案内状をいただいて参加した。研究会の後の二次会も、耳学問の宝庫のようで楽しい。

去る十月上旬の、この会の二次会の折のことである。隣にすわっていらっしゃった萩原さん（元高校の校長先生）が、向側にいらっしゃった田中さん（編集長）に、杉本先生を送ることば云々……という話をはじめられた。私は、それに口をはさんで、〝杉本圭三郎先生のことですか？〟と尋ねた。萩原さんは、それで丁寧に、杉本先生のご退任のことや、平家物語のご研究のことなどを話してくださった。私は、二十年ぶりに杉本先生のお名前を聞いたのだが、先生のことは、非常に鮮明な印象がある。〝なぜか、杉本先生だけは、スクーリングでお会いしただけなのに、フルネームを覚えているばかりか、スクーリングの授業風景も講義内容も覚えている〟というようなことを話した。その時、萩原さんと田中さんが、異口同音に、〝送ることばをあなたに書いてもらいましょう〟と言われた。他に、適切な方も多くいらっしゃるだろうし、また、是非書きたいと思っている方々をさしおいて、私が書かせていただくはずもないのだけれど、と思いながらも、書いてみたい気持ちがあって、翌日、広島のわが家から、改めて〝ほんとうに、私が、書いてもいいのでしょうか〟と、田中さんに電話で問い合わせた。田中さんの、〝杉本先生の、通教生への影響ということも面白いから〟とのご返事で、私が書かせていただくことになった。

杉本先生の授業を、私は四日間受けただけである。なぜ四日だけなのかというと、その理由は、私が、最初の日と最後の日とを休むことにしていたからなのである。スクーリングは六日間つづいている。だが、四日間で受験資格がもらえる。それで、家庭の事情を優先して勘案し、中間の四日を受講するというパターンに決めていたのである。あたりまえのことだが、この方法は、単位を取得するという観点からみると、かなり無謀なやりかただったようである。英語の川成洋という先生――このお名前は、以後時々、朝日新聞紙上でお見かけした――は、試験の当日に、〝きょうは、非常に大胆な人がいます〟と、言われた。〝授業の最初のガイダンスを聞かず、最後の試験範囲の発表も聞かないで、受験する女性がいるのです〟と言われた。教室に笑

い声がおこった。三十人程度の少人数なので、一番前にいる私のことだと分かったようで、はずかしかった覚えがある。私の成績評価は、「C」という文字がたくさん並んでいたことも思い出す。

こんなわけで、杉本先生にお会いしたのは、二十年ほど前の夏のスクーリング第二日目のことである。このときも、私は、一番前の真ん中の席についていた。スクーリングではどういうわけか不思議と、それで居心地がよかったのである。

先生のポロシャツ　定刻になると中肉中背の、どことなく学者らしい風貌の先生が、ちょっとせかせかした歩き方で、半袖の薄ねずみ色の鹿子のポロシャツを着て、手には、テキストの文庫本を一冊持ったばかりで、ほかには何も持たずに入ってこられた。次の日もその次の日も同じであった。それで、先生のポロシャツは、いつ洗濯されるのかと、少し心配になった。が、ついに、四日間とも同じポロシャツだった。先生の、あのポロシャツは、いつ洗濯されたのだろうかと、今も気になっている。

授業風景　授業のやり方は、最初に、ひとりの受講生に、本文を読んでもらってから、二度目に、先生が、少しずつ読みながら、説明をするという方法であった。この方法が、とてもよかった。教室が、読みの醍醐味の場になるという体験をしたからである。

テキストは、『今昔物語集』(角川文庫)で、巻第二十九の本朝世俗・悪行の巻である。私は、「人に知られざりし女盗人の語第三」の、終りの部分から受講した。物語りの終りにある、『今昔』の作者の批評のことばを読んでから、杉本先生は、女盗人の統率力の凄さを話された。野生的で、迷いを知らないで、生きぬく女の力ということを、一般化されて、物静かな落ち着いた声で、しかし、熱意をこめて訥々と話されたのである。

次は、「世に隠れたる人の聟と成□語第四」である。ここでは、謎につつまれた生活のなかで、〈命も惜しく、亦妻も去り難く〉と、心の中で動揺する男の話をしてから、〝これが男心というものです。〟と、さらりと言ってから、さわやかに少し微笑んで顔をあげて皆を見回された。この時、初めて笑顔を見せられたのだが、内容が内容で、先生の雰囲気にそぐわないようで、奇妙なおかしみがあった。

『今昔』の世界の、都市の底辺で生活している、さまざまな生業の男も女も、杉本先生は、本当によく知っている身近な人達のように話をされた。生活語彙を、印象深く説明された。ほかの古典ではめったに出てこないような、なまなましい、深刻な生活のようすを手に取るように話された。まるで、王朝時代から抜け出してこられた古老ででもあるかのような錯覚をしてしまいそうな感じだった。

この教室風景は、いつも同じポロシャツ姿の先生を前にして、一枚の絵のように、私の脳裏にしっかりと記憶されている。

(ふるた　よしえ・広島女子商短期大学教授)